

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19592514
研究課題名（和文） 高齢者の死生観とスピリチュアルペイン
—構造の明確化とケアプログラム作成—
研究課題名（英文） The view of life and death and the perception of spiritual pains for the elderly: Clarification of the structure of pain and the care program planning
研究代表者
小松 万喜子 (KOMATSU MAKIKO)
愛知県立大学・看護学部・教授
研究者番号：50170163

研究代表者の専門分野：看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：スピリチュアル，死生観，高齢者，看護職，介護職，在宅，老人福祉施設

1. 研究計画の概要

(1) 目的

- ①老人福祉施設および在宅において高齢者のケアに携わる看護職者・介護職者がとらえている高齢者のスピリチュアルペイン、スピリチュアルケアの実践状況を明らかにする。
- ②老人福祉施設および在宅で過ごしている高齢者の死生観とスピリチュアルペインの様相と関連性を明らかにする。
- ③上記の結果に基づいて、高齢者のスピリチュアルペインを緩和するケアプログラム、高齢者の肯定的なスピリチュアリティを維持・強化するケアプログラムを構築する。

(2) 研究方法

- ①高齢者をケアしている看護職者・介護職者を対象に面接調査を行う（当初計画では質問紙調査を計画していたが、面接調査を行う計画に変更）。対象の内訳としては、老人福祉施設に勤務する看護職者・介護職者 8～10 名（各 4～5 名）、在宅の高齢者ケアに従事する看護職者・介護職者 8～10 名（各 4～5 名）を予定した。調査内容は、属性、対象がとらえている高齢者のスピリチュアルペインとケア実践に関する項目、スピリチュアルペインのとらえ方、ケア実践行動に影響する要因に関する項目である。
- ②老人福祉施設および在宅で過ごしている高齢者各約 10 名を対象として死生観とスピリチュアルペインについて面接調査（当初計画では質問紙調査を計画していたが、面接調査に計画変更）を行い、その様相と関連性を検討する。あわせて、対象の背景、人生の過

ごし方・とらえ方、健康状態などを調査し、死生観およびスピリチュアルな側面との関連を分析する。

③上記分析結果に基づいて、高齢者のスピリチュアルケアプログラム（案）を作成し、その実行可能性、効果の予測、評価方法についてケア提供者にグループインタビューを行って、自由に意見交換していただく。これを踏まえて、ケアプログラムを修正し、ケアプログラム実施の手引（案）を作成する。

2. 研究の進捗状況

平成19年度（助成が追加決定であったため研究着手は10月以降）は、計画着手が予定と異なったためスケジュールと内容の修正を検討し、平成20年度の調査のための準備を行った。特に、研究目的①に対応する研究方法①の調査を行うために、調査内容を構成する概念・要素を抽出すべく、さらに詳細な文献検討を行った。また、スピリチュアルという深い課題に迫るため、高齢者看護を専門とする研究者から、本研究の遂行に関する意見を聴取した。この検討結果をふまえてインタビューガイドとインタビューの進め方を検討した。

平成20年度には、研究目的①に対応する研究方法①について詳細な調査計画を立て、研究倫理審査を受け、一部修正ののちに承認を受けた。この過程で調査対象者の所属や専門性などのバランスを考慮し、対象施設の幅をひろげるとともに対象者数を増やすことにした。研究倫理審査と各施設への調査協力依頼に手間取り、面接調査の開始は年度後半とな

った。そのため、この面接調査を平成21年度まで継続して行った。これにより、①の老人福祉施設および在宅において高齢者ケアに携わっている看護職者・介護職者に対する面接調査は概ね終了した。平成21年度後半より、面接内容のデータ化、カテゴリー化に取り組み、現在も分析中である。なお、現段階の課題として、所属施設が「看取り加算」「ターミナルケア加算」を行っているか否かもケア提供者の知識や態度に影響を与えている可能性がうかがえた。よって、データ収集の不足部分を補う目的で、平成22年度に追加面接調査を行う予定である。また、当初計画していた質問紙調査の必要性についても平成22年度に再検討する予定である。

平成22年度には、上記の課題に対応する面接調査と、研究目的②・研究方法②で示した高齢者自身への調査と、研究目的③・研究方法③で示したプログラム立案とグループインタビューを実施する予定である。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている

(理由) 初年度の助成決定が追加決定であり研究着手が半年以上遅れた。計画の修正を試みたが、結果的に常に少しずつ遅れた進行になってしまった。また、調査内容がスピリチュアリティという内面の深い部分に触れるものであることから調査手順などの見直しが必要となった。くわえて、面接対象者の偏りを避けるために面接協力を複数施設に依頼したために、依頼および面接調査の日程調整などで手間取り調査期間が長引いたことなども影響した。間接的な理由であるが、研究代表者の所属大学が新大学設置および学生定数の増員などの変化の時期にあり、それによって本務の業務量が予定外に増えたことも研究者の研究時間の確保を困難にしている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 面接調査のデータ分析の遅れに対しては、本務を調整して研究遂行に費やす時間を確保しなければならない。しかし、限界があるので、データ化などの段階で研究補助者を求めて効率をあげるなどの工夫をしていく。

(2) 本研究の独創点の一つとしてあげている高齢者自身に対する調査が未実施であることに対しては、早急に倫理審査委員会への申請を行い、面接調査を計画に沿って実施する。なお、この調査にあたっては、死やスピリチュアリティというデリケートな内面に触れることから、施設利用者に対する面接について老人福祉施設などの協力が得にくい状況もある。この点については、共同研究者の助力を得て開拓していきたい。

(3) 当初予定していた質問紙調査を実施していないことについては、面接調査結果の分析を早く行い、質問紙調査の必要性から再検討する必要がある。必要と判断された場合は、平成22年度あるいは、研究期間終了後の継続課題とすることを考えている。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)